

檜山節考

——映画文学人生論

原作：深沢七郎（1956年）中央公論社 参考：山田風太郎
監督：木下恵介（1958年）参考：『あと千回の晩飯』
出演：おりん 田中絹代 脚色：木下恵介
辰平 高橋貞二 撮影：楠田浩之
玉やん 望月優子 音楽：杵屋六左衛門
又やん 宮口精二 野沢松之輔

塩屋のおとりさん運がよい

山へ行く日にや雪が降る

深沢七郎『檜山節考』が中央公論新人賞に選ばれて、読書人の注目をあびたのは今から半世紀以上前の昭和三十一年。題名は知っていたが、「ならやませっこう」と読んだ。当然、内容を読む力はないし、読む気もない。

それから半世紀の歳月がながれ、ようやく私も『檜山節考』を読む適齢期になった。世が世ならおりん婆さんのようにお山へ行く適齢期である。

塩屋のおとりさん運がよい

山へ行く日にや雪が降る

村では七十歳になれば、檜山へ行くことになっていた。雪が降れば、その人は運がよい人だといふに伝えられている。

なぜ運がよいのかわからない。木下恵介の映画では田中絹代がおりん婆さんに扮して山へ行く日に雪が降っていた。綿入れは着ていない。

なんぼ寒いとって綿入れを

山へ行く日にや着せられぬ

七十歳になれば、お山へ行くというきまりをつくったのは村落共同体の智慧である。口べらしをすることによって、子孫が食べる食糧を確保し、



楢山節考

映画文学人生論

綿入れを残すことによつて、子孫はきびしい冬をしのぎやすくなる。

おりんは素直に村のおきてにしたがったが、なかにはその時期がきてもお山へ行きたがらない者がいる。隣りの又やん（宮口精二）もそんな不心得者のひとりだったが、息子（伊藤雄之介）に無理矢理連れていかれ、谷底に落ちて死んだ。

現代の日本には七十歳になったらお山へ行くと
いうおきてはない。そのため。七十歳以上の人口
が二二二万人（総人口の一六・七％）に達してい
る（平成二十二年の統計）。少子高齢化が深刻な
社会問題になっているが、二千万人の高齢者がお
となしくお山へ行けば、問題の大半は解決するに
ちがいない。

と、おりんさんの潔い態度に共感しながらも、
私は又やんのように生に執着しているようだ。

山田風太郎は『あと千回の晩飯』で。「いろい
ろな徴候から、晩飯を食うのもあと千回くらいだ
ろう」と書いている。そのときの風太郎の年齢は
七十二歳。没年は七十九歳だから、実際には二千
回以上の晩飯を食べた。ならば、私はあと三千回
以上の晩飯を目標にしたいと欲張るのは、「つひ
にゆく道とはかねてききしけどきのふけふとは」
と
思っているからだろう。おりん婆さんの爪の皮
を煎じて飲んだほうがよさそうだ。

さからわずお山へ行けば雪が降る